



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18m</sup> 11 12 13 14 15

始









特100  
594



死

加







危きは身みの年ね少せうに撃う襲せうの人人じん蠻ばんるな猛もう擗び  
? 方か味み? 敵てきソソドドズ……ソソドドズリせ迫ほ切せ機き  
よ見みを容ゆる内ない……何なんか如ごといや行ゆき成なり其その續つぞ連れん聲こゑはは



目次

一、暗夜の悲鳴……………一

二、銃殺か捕虜……………三

三、小説より奇なり……………三

四、痛快なる山賊征伐談……………三

五、世界的大發明……………四

六、ケンブリッチ大學へ……………四



七、何處ぞで見た顔……………五六

八、汽船は暗礁に乗り揚げた……………六三

九、意外なる求助者……………七一

一〇、忠僕荒井剛助を得た……………八五

一一、亞佛利加觀光團組織……………一〇一

一二、熱血少年の愛國論……………一三三

一三、奇怪なるピストルの威力……………一四四

一四、卑怯なる決闘の取消……………一五〇

一五、巖上から真逆様……………一五五

一六、回教徒の襲撃……………一七六

一七、生？死？是れ天命……………一九〇

一八、骸骨で出来た道路……………二〇〇

一九、我が生、死の一擧にあり……………二〇九

二〇、譽は高し日本少年……………二二八



冒險 奇譚 生 ？ 死 ？

俊 碩 劍 士 著

一 暗夜の悲鳴は何ぞ

雑木の枯葉の上へ、赫々と光りを投げてゐた夕陽は、何時か地平線上に没してしまつた。

時を求めて飛び廻つてゐた小禽の群も、皆それぞれに一夜の宿を捜し當てたのであらう、此處の林、彼處の森にも、その影を見出す



ことが出来なくなつた。

久し振の快晴の日曜に勇み立つた健兒は、學校朋輩の山下巖と二人、空氣銃を持つて郊外に小鳥狩りを試み、意外に獲物が多い面白さに、それからそれへと鳥影を追つて、つい遅くなつてしまつた。

「君！山下君、もう歸らう、暗くなつてしまつたせ！」

健兒はかう呼びかけながら、巖の居る方へ寄つて來た。

巖少年は、枯れ枝に纏はつて赤く熟した梅もどきの枝を取つてゐるところであつた。

「あゝ、もう歸らうか。」

と答へながら、まだゴソ／＼遣つてゐる。

その傍へ來た健兒は、

「何を取つてゐるんだ？梅もどきか、大分赤くなつてゐるね。」

「うむ、姉様が欲しがつてゐるからお土産にするんだ。」

「君は同胞が多いから可いなあ……僕には少さい弟ぎりで、淋しくつて仕様が有りやしない。」

漸く採り終つた巖少年は、

「その代り喧嘩する時は、餘り相手が多いので厭になつてしまふよ。」



かう笑つて答へながら、健兒と立並んだ。そして、獵囊の中の獲物の多い少ない、さては今日の銃獵に於ける功名譚、失敗談などを語りつゝ、二少年は歸途に就くのであつた。

氣の合つた友人と、愉快なことを話しながら歩くので、終日、野や山を縦横無盡に駆け廻つた足にも、行程は捗取つて、この小丘を一つ越えれば、最う東京へつゞく町並が見えて、鐵道線路の踏切りへ出ると云ふところまで来た。

日は毎の間にカトツブリと暮れはてゝ、ブリウブラックの幕を張り渡した空には、ダイヤモンドを無數にちりばめたやうに星が輝い

てゐる。

四隣はすつかり暗くなつて、人通りの絶えた山路の、落葉うづたかき中を、何んとは知れず走る獸の蹀音がゴソ／＼と聞えるばかり

……物凄さは一時に迫つて來るのであつた。

然し、勇敢なる二少年は、この位の淋しさに怖れるやうな事がな

い。  
勢ひよく坂を登つて、もう二三丁で頂上へ着くと云ふところまで來ると、上手の方に當つて、突然に帛を裂くやうな怖しい叫び聲がした——どうやら女の助けを乞ふ悲鳴のやう。



「おい、何んだらう？」

とまづ健兒が歩みを止めて耳を傾げた。

巖少年もおなじやうに耳を敬てたが、

「何んだか女の泣聲がするやうぢやないか。」

と言ふ。

「僕にもさう思はれる。」

と健兒はますます不審顔で、

「事に依ると、こんな淋しい山の中だから追剝ぎでも出て、通行の

女を捉へ亂暴を働いてるんぢやあるまいか。」

「或ひはさうかも知れない。このまゝ知らぬ顔して捨て、おかれま

い。」

「然うとも！兎に角、大急ぎで駆着け、時機に依れば悪人共を懲し

めてくれやう。」

「面白い！大賛成。」

「それ！駆足！」

「進め！」

二少年は駆足で、彼の女の悲鳴した方へと葦駄天走り……

頂上は路が十文字になつてゐて、最初の一聲に續いて猶も悲鳴す



るのは右手の方である。

「——あれッ助けて！」

救助を求める女の悲鳴はますます急を告げて来た。

その悲鳴を目標に、疾風の如く駆けつけた二少年が、現場から四五間の間近かへ達した時に、悪漢が此方へ来るものありと悟つて手を緩めたのであらう——顛けつ轉びつ二少年の方へ向つて逃げ来たつた美しい少女は、

「——助けてください！」

と叫びながら、突然健兒に抱くのた。

悪漢は依然その場こ立つて、此方の動靜を窺つてゐる。黒布で覆面をした、雲突くばかりの大男であつた。

健兒は、我れに取絶る彼の少女を後方へ蔽つて、巖少年と共に悪漢の方へ立向つた。

そして元氣に満ちた凜たる聲で、

「おい！汝は何を亂暴するんだ！」

と大喝したのである。

彼方の悪漢は、この場へ助けに飛込んだのが、まだ漸く十五六になる二少年のみと見定めぬや、



「小僧の癖に生意氣な真似をしやがると、満足のまゝぢや歸さないぞ。」

と健兒を目蒐けて打つて掛つた。

敏捷な健兒は、素早く二三步飛退いて、肩にしてゐた空氣銃を取

下すや賊に突付けた。

「亂暴すると撃つぞ！これには彈丸が込めてあるぞ。」

健兒の持つてゐる銃は、少年用の空氣銃ながら、イギリス製の精

巧無比な物で、一見、普通の獵銃と違はないばかりか、効力とても

二十間以上に飛んでゐる鳩を、十分に射落すことの能きる位なもの

である。

實際、發射するとすれば、素手の惡漢一人ぐらゐの暴威を殺ぐこ

とは困難でない。

咄嗟の場合——惡漢は空氣銃とは知る由もなく、突然、銃口を差

向けられたので、

「何を！」

とは言つたが、進む事も退く事も出來ず、其場へ立竦みとなつて

狼狽。

「こゝら、動けば直ぐ擊殺すぞツ。」



健兒は曳金に手を掛けながら、少しの油断も見せず賊と相對した。

## 二 銃殺か捕虜か

斯うして、二人が睨み合ひをしてゐる隙に、巖少年は少女を連れて五六間手前の松蔭へ連れ込んだが、忽ちこの場へ引返して、

「川瀬君！其奴が少女の持つてゐた金を強奪たと云ふせ。」

と言ひつゝ、自分も健兒に做つて空氣銃を惡漢に向けた。

「何？彼の少女の金を奪つたと！うむ、實に怪しからん奴だッ、這

様惡漢は殺しても構ふもんか。さあ、二人で一齊射撃しやう。」

「面白い！それ、一二三！」

今や將に火蓋を切つて放たんとするに、さもしの惡漢も驚いて、

「——待つてくれ！生命ばかりは助けてくれ。」

と情無さ相な泣聲を揚げながら、其場へベツタリ跪いた。

「汝のやうな惡漢でも生命が惜しいか。」

健兒は一步進んで、

「其れなら何故惡事を働いた？人道に外れた行爲すれば、天の制裁を受けるは最初から知れた話だ。今茲で吾々が天に代つて、汝の生



命を奪つてくれるから有難く思へ。」

「痛快！」

巖少年も同じく前み寄つて、

「何うしても汝を免すことは出来んぞ。さあ、悪人らしく覺悟して

勝負しろ。」

と罵り立つ。

如何に悪漢は罵倒されても、素手で飛道具の前に戦ふ勇氣はない。

いや、それを事ともせず奮闘するほどの勇氣があるなら、斯る夜の

山中で、少女の所持金を強奪するやうな些細な働きをする筈はな

い。

悪漢は見苦しくも其場へ犬突這ひとなつて、

「何、何うぞ御勘辨を！彼の少女の金を奪つたのは一時の出来心で

ございます。決してお手向ひはしませんから、何うぞ生命だけはお

助けを……。」

鬼を欺く髻面に涙が流れる。

「何？一時の出来心だ？」

「左様でございます……何うぞ御勘辨を願ひます。」

「それほど生命が惜しくば、吾々も強いて殺生はしたくないから免



しても遣るが、その代り彼の少女から奪つた金を出せ！」

と健兒は言つた。

斯うなつては悪漢も是非がない。健兒と巖少年から攻め立てられる苦し紛れに、今、少女から強奪した財布を澁々ながら取出した。

健兒は手早く是れを取つて、後方の松蔭に慄えてゐる少女を手招いた。

「あなたの奪られたのは是れに相違ないんですか。」

怖る／＼松蔭を立出でた彼の少女は、まだ恐怖に満ちた顫え聲

で、

「——はい、それでございます。」

「さうですか、一應囊中を調べて見たまへ！」

と手渡す。

少女は受取つて、

「確かに奪られたお金がございます——まことに有難う存じます。」

と感謝の聲も戦き勝ちに。

「他に奪られた品物はないんですか。」

と今度は巖少年が喙を容れた。

「へえ、それだけに相違ございません。」



悪漢は少女に代つて斯う答へた後、

「お慈悲を持ちまして生命はお助けを……」

と罪の許しを哀願する。

健兒はそれに答へず、

「山下君何うしやう？この儘許してやるより、僕は此奴を捕虜にし

た方が可いと思ふが……」

と巖少年に相談するのであつた。

悪漢は捕虜にすると聞いて、一層恐れたらしく、

「これさき悪事を廢めて眞人間になりますから、何うぞお許しを。」

と米搗蟋蟀のやうに謝罪り入る。

「うむ、捕虜にするのは愉快だが、こんな野猪のやうな奴を引張つて行くのは面倒だからな。」

と巖少年は見遁して遣る考へらしい。

健兒も、助けて遣つた少女を、那邊か知らねど、其の住家まで送り届けねばならぬのに氣が注いたので、

「ちや、汝はその覆面を取つて顔を見せて置け！さうすれば勘辨して遣る。」

悪漢でも人間の皮を被つてゐる以上、聊か羞恥心はあると覺しく、



覆面を取つて顔を見せるのを非常に嫌がつたが、健兒が眞に悔悟したもののなら、顔を見せられない道理がないと云つて聞き入れぬので、悪漢は不性無性に覆面の黒布を取つた。

懷中電燈を出して、バツと悪漢の髯面を照して見た健兒は、

「可！許してくれる。今後二度と再びこんな悪事を働けば助けて置かんぞ。最う勘辨してやるから早く行け！」

漸く許された悪漢は、鐵檻を放たれた野獸のやうに、急いで暗のうちへ姿を没してしまつた。

### 三 事實は小説より奇なり

跡をも見ずに逃げ去つた悪漢——それを見送つた二少年は、

「痛快！痛快！」

と雀躍して互ひに意外な勝利を祝し合つた。

やがて、健兒は彼の少女に向つて、

「一體あなたは何處の人ですか。そして、何う云ふ譯で今時分こんな淋しい山道を一人で歩いてゐたんです。」

と親切に問ひかけた。



渡河に舟を得たと云はうか、暗夜に燈火を得たと云はうか、少女は限りなき感謝の念に涙さへ浮めて、

「お二人のお蔭様で危い災難を免れまして、まことに有難うございます。」

と二少年を伏拜み、そして、家はこの山向ふの、目黒村の者であることから、今日麻布の父が御奉公してゐるお邸へ行つて、父の給金を受取つての歸りがけ、病氣になやむ母の薬を貰ひにお醫者様の許へ立寄り、其處で長い間待たせられ、暗くなつて歸りがけの山路で、悪漢の爲めにお金を奪はれやうとしたことまで一部始終物語る

のであつた。

「それは危い處だつたね。目黒村まで歸るには、何うしてもこの山を越えなくつちやならない。途中に今の悪漢が待伏せして居ないとも限らないから、僕等二人でああなたの家まで送つてやらう。」

「まことに恐入りますが、何うぞさうして戴き度うございます……私一人で歸るのは怖くつてなりませんから。」

「あゝ可いとも！決して心配しなくつても宜い。山下君、目黒なら何うせ歸り道になるのだから送つてやらうぢやないか。」

と健兒が言へば、



「可！送つて行かう」

と巖少年も即座に賛成する。

二少年は彼の少女を護衛して、暗夜の道を怖れ氣もなく、高らかに詩吟などしながら目黒村まで送つて行つた。

間もなく目指す目黒村へ着いた。人家の在る處へ來てから四五丁も進むと、

「あの、私の家は遂ひこの先でございます、お二人の御厚意を母様にもお禮を申していたとき度うございますから、まことに穢ない住居ですが鳥渡お寄りください。」

村の入口で別れると云ふ二少年を、少女は頼むやうにして我家へ案内した。

少女の母は、長い間病氣で臥て居るのであつたが、少女が歸るなり、途上で危ういところを助けられた事を話したので、強ひて病床から這ひ出して、二少年に禮を言はうと健兒の顔を見るなり、さも驚いたらしく、

「まあ、麻布の若様！」

麻布の若様と呼ばれて、健兒も驚いてみれば、長い間の病氣のため、瘦せた顔は太くも變つてゐるが、それは健兒の家の老爺の女房



で、麻布へも度々訪ねて来たので能く知つてゐたから。

「媪やの家は此處か。」

と呆れて目を丸くする。

「はい、手前の家は此處でございますよ、若様、能くまあ……。」

「僕は些とも知らなかつた！そして媪やの娘なのか、僕等の助けたのは……。」

と唯最う驚くばかり。

この奇遇には巖少年も驚いて、

「何んだか小説みたいだなあ。」

と不思議がるのであつた。

「では母様。」

と少女は母を見上げて、

「私のお助けして戴いたのは、今日母様の代りにお伺ひした麻布のお郎の若様ですの？」

「あゝ然うだよ！思ひがけなく若様に助けていたゞくなんて、全く不思議な御縁でございます。」

と親子は厚く禮を言ふ。

猶も媪やは言葉をついで、



「これと申すのも、娘のお菊が親孝行をしてくれますので、神様が若様方とお引合せくだすつたのでせう。」

と涙を流して喜ぶ。

そして、娘のお菊が、病氣の母を大切にしてくるることなど物語つて、是非今夜はお泊りくださるやうにと薦めるのであつたが、二少年は餘り遅くなると、我家で心配しやうからと、引留める袖を振切るやうにして媪やの家を立出でた。

東京へ戻る途すがら、

「健兒君！事實は小説よりも奇なり——とは眞實だなあ。」

と巖少年は一つ事ばかり繰返す、健兒も至極同感であつた。

#### 四 痛快なる山賊征伐談

目黒村へ孝女お菊を送つて後、途中で親友の山下巖と袂を分かち、

健兒が麻布の我が邸へ戻つたのは、もう夜も九時過ぎであつた。

麻布の健兒の邸では、何時になくその日の飯宅が遅いので、家内の人々は太く心配し、老爺の作藏が、健兒と一所に出掛けた山下の家へ問ひ合せに行かうとしてゐるところへ、

「唯今！」



と健兒は威勢よく賑つて来た。  
その元氣に満ちた聲を聞くと、上女中のお皆が中玄關へ飛んで出た。

「おや、若様お賑りあそばせ。」

「今日は飯宅が遅くなつたんで、さぞ母様が御心配なすつたらう。」

「はい、大相御心配なすつていただきます。若様、何うしてこんなに遅くおなりなさいましたか。」

「聊か理由あり！ まあ、奥へ行つてから緩り話さうよ。」

健兒はお皆に空氣銃を渡し、式臺へ腰をかけて靴を脱ぎ捨てるや、

足を洗ふべく勝手口の方へ廻つて行く。

勝手口では、今しも出掛ける仕度をしてゐた作藏老爺が、

「若様！ 偉く遅いお飯宅でがすね、奥様が大變な御心配でございませぞ。」

と言ひながら盥に冷水を汲んで来た。

健兒はサツサと足を洗ひながら、

「その遅くなつたには理由があるんだ！ 老爺には是非話さなくつちやならんことだから、跡で母様のお部屋へお出で。」

「何んだか面白さうなお話でがすな。」



と作藏は笑ひ顔。

その間に健兒は足を洗ひ終り、茶の間の母様の前へ来て、

「母様、今日は大變に遅くなつて済みません。僕、今日途中で少し異變つた事件が惹起つたもんですから。」

と言譯のうちにも自慢顔。

母様は、健兒の飯宅の遅いのを誰よりも餘計に心配してゐたが、我子の無事な顔を見ると、急に不安に曇つてゐた愁眉を開いたが

「異變つた事件」と云ふが氣がゝりの體で、

「健兒——何か怖しい異變でもありましたか。」

「今日のやうな痛快極まることは始めています。」

と健兒は如何にも得意氣だ。

「それは甚麼ことです、母様に話しておくれ。」

「お話しますとも。」

健兒は勝手に向つて、

「お皆！作藏老爺！」

と聲高に呼ぶ。

「若様、御用でがすか。」

作藏老爺は上女中のお皆と共に茶の間へ顔を出した。



「二人とも此方へお這入り！これから愉快な事實譚を始めるから。」  
 母様を始めとして、作藏老爺もお皆も、健兒が甚麼奇抜な、そして  
 痛快な物語りするかと片唾を呑んで控へる。

健兒は傲然と肩を聳かせた。

「今日は日曜なんで、母様のお許しを受けて、僕は山下の巖君と一緒に銃獵に出掛けたんです。それで何時もよりは三倍も鳩や雀も獲つたんで、思はず遠方まで出掛け、やうく目黒村の先の山まで戻ると、日はもう全然暮れてしまつた。餘り遅くなつては、我家で母様が御心配なさらうと思ひ、大急ぎで山を越えやうとすると、行手

の暗のうちから憐れな少女の悲鳴がするんです。僕も山下君も吃驚して、その悲鳴のする方へ駆着けると、覆面した一人の悪漢が、十四五になる少女の金を奪つて逃げやうとする處なんです。」

「そ、それは大變でしたね——若様も山下の坊ちやまもお怪我のないうちお逃なさいましたか。」

とお皆が喙を出す。

「馬鹿言つてら！」

健兒はグイとお皆を睨みつけて、

「僕等はそんな弱虫ぢやない。それッ！と言ふより早く、悪漢の方



へ突進して空氣銃を差向けたんだ。すると、悪漢は眞物の獵銃と間違へて逃げる事が出来ず、その場へ平伏つて『何うか生命ばかりは助けてくれ』と泣いて頼むんだ。

「然うでがせうとも！いくら悪漢だつて生命の惜しいに變りはありませんでな。」

と作藏老爺は若様の肩を持つ。

母様は微笑しつゝ聞いてゐた。

「それでね。」

健兒は猶も説きすゝんで、

「僕等だつて、何も無暗に人の生命を奪るやうな亂暴したかない。

其處で、悪漢に向つて生命が惜しくば赦してくれるから、少女から強奪した金を返せ——さうしたら勘辨して遣らうと言ふと、先方も生命に換へる寶はないから仕方なしに奪た金を差出したので、その儘追拂つてくれたが、何うせ販り途なので、その少女を目黒の家まで送つてやつたよ。」

「へえ、その娘は目黒の者でがすか。」

と作藏は膝を前めた。

「手前も目黒の生れで、斯うしてお邸へ御奉公はして居りますが、



女房や娘は目黒に住んで居ります。その目黒なら一軒残らず知つて  
 るのですが……一體何んと云ふ家でございますか。」

「老爺！吃驚しちや可けないよ、僕や山下君が助けた少女と云ふの  
 は……今日麻布の邸へお前のお給金を取りに来た娘なんだ。」

「えッ、手、手前の娘——あのお菊で。」

「うむ、そのお菊なんだ！」

と健兒は頷いた。

「最初は僕も老爺の娘とは知らなかつた。其所の家まで送つて行く  
 と、病氣で寝てゐた母親と云ふのが大相喜んで、僕達にお禮を言ひ

たいと、病床から起きて来たのを見ると媼やなんぢやないか、僕も  
 驚けば先方でも驚く……彼れが眞實の奇遇と云ふもんだ。」

「まあ、まあ、世には不思議なこともあるものですね。」

と母様もその奇遇に太く打驚かれた。

「目黒からお菊が邸へ見えたのは、まだお正午が過ぎて間もなかつ  
 たが、何うしてそんなに歸りが遅くなつたのでせうね。」

「何んでも途中で媼やの薬取りにお醫者様へ廻り、其處で大相隙を  
 取つたと云ふ話でした。」

この物語を聞いた作藏老爺の喜びは中々言葉にも盡されぬ程で、



「若様有難う存じまする！」

と健兒の手を取つて押戴きながら、

「この御恩は忘れません！はい、若様は娘の生命の親でございませぬ。この御恩は手前達親子三人が一生忘れは致しませぬ。」

と深い感謝を現はして言ひ續けるのであつた。

さうして、健兒が今日獵の獲物が何時もより多かつた事を自慢顔に、小禽を收れた獵囊を茶の間へ持出した時分には、作藏老爺は、

「早速山下の坊ちゃんにもお禮を申上げてまゐります。」

と女主の許しを受けて、程近い巖少年の家へ出掛けて行つた。

母様は莞爾顔で、

「お前が遅くなつたのも、然う云ふ譯なら仕方がありません。能くそれでも老爺の娘を助けて遣りましたねえ。」

と言つてお譽めなすつた。

「ですが、若様。」

上女中のお皆も隊を出した。

「空氣銃を眞實の鐵砲だと言つてお脅かしになり、よく先方の悪漢が氣が注ぎませんでしたねえ。」

「だつて、先方は強さうな奴なんだから、尋常の勝負ぢや僕等が敵



ふ筈がない、其處で巧く計略に掛けてやつたんだ。  
健兒は愉快さうに笑つた。

### 五 世界的大發明

やがて、母様は氣が注いたらしく、

「健兒！お前がさう言ふ大手柄をおしなのだから、その御褒美に好い物を見せて上げませう。」

と言ひつゝ、違ひ棚の手文庫を取下し、其裡から取出したのは一通の電報。

「さあ、健兒これを御覽なさい。」

健兒は何事かと電報を手に取上げたが、

「やあ、これは房州の父様から届いたんですね。」

「然うです！早く拜見なさいよ。」

母様から言はれるまゝに、健兒はその電報を押戴いて開き見れば、

ハツメイドキタ アスカエル

と云ふ文言であつた。

「いよく父様は御發明が出来たんですね。そして、明日は東京へ



お歸りなさるんですね。實に愉快だなあー！  
と健兒は雀躍して打喜ぶ。

健兒の父なる川瀬直人は、薬學博士及び理學博士の學位を有つて、今は海軍火薬製造所の囑托披師を勤め、其筋の命を受けて、無煙無聲火薬の發明に従事して居られるのであつた。

既に十數年の間苦心して、漸く理想に近い物を完成したが、其の爆發力の如何を確かめる必要があり、何分、世界の學者が競つて其の發明に苦心してゐることゝて、尤も秘密を要すると云ふので、房州館山沖の離れ島なる沖の島へ其の試験所を設けて、この春以來目

的を達するまで歸宅せぬと言ひおいて出掛けたのが、いよ／＼明日歸ると云ふのだ。

而もその發明が出来たと、斯うして留守宅に電報が届いてあるからは、立派に完成したのは無論のことであらう。

健兒は満面に溢るゝ笑みを傾けた。

「父様はいよ／＼無煙無聲火薬の御發明が出来たんですね。あゝ、こんな愉快なことはありません。」

「母様もどんなに安心したか知れませんが、さぞ父様も御満足でお在りませう。」



「實に川瀬家萬を歳です！何んしろ、世界の學者達が寄つてたかつて、我れこそ真先に發明しやうと競争してたのを、僕の父様が第一番に成功したんですから、世界發明界の霸王と云ふべきです。」

と健兒の喜びは一通りでない。

母様もまた同じ喜びに嬉し涙さへ零すのであつた。

「ぢや、明朝は早く父様がお歸宅ですね。僕、今夜は早く寢て明日は靈岸島まで父様を御出迎ひに行きませう。」

「母様も御一緒にお出迎ひませうよ。」

この夜一夜の明けるのが、健兒親子の爲めには千秋の思ひで、臥

床に這入つてからも中々に寢付かれず、兎もすれば、父様のお噂に花が咲いたが、曉方近くなつて漸く少し眠つたかと思ふうちに、軒端に小鳥の啼く聲がしたので、健兒は勇しく臥床を蹴つて起きた。

母様は、久し振で父様が御歸宅なさると云ふので、朝飯の箸を置くもそこへ、健兒を連れて靈岸島へ出掛けた。

待つ間もなく、房州から東京通ひの汽船が着いた。

その甲板に父様の姿が見えた時、健兒は母様の制止も聞かずに萬歳を連呼したのである。

聽て、艇に送られて上陸した父様は、



「おゝ！健兒大きくなつたな。」  
と愉快さに微笑を洩らしながら、幼い子にするやうに頭を撫せられた。

「貴郎、此度はお目出度う存じました。」  
と母様は莞爾しながら御挨拶。

「うむ、多年の希望が叶つて這樣愉快なことはない。然し、お前も留守中はいろく、骨が折れたらう。俺の今回の發明も、その一端はお前が内助の功に依るのだ。」

健兒は唯嬉しさに萬歳々々とばかり、幾度も繰返してゐた。

## 六 ケンブリツチ大學へ

川瀬博士の發明した無烟無聲火薬は、其名を取つて川瀬火薬と命名された。

勿論、帝國陸海軍の直ちに採用するところとなつた爲め、其の効力の程は絶對的秘密にされてゐるので、評判は知る由もないが、彼の十五年前、日露戦争の際、日本の下瀬火薬が偉大なる効果を發揮して、露軍が其爲に蒙つた損害は多大なるものであつたが、今回の新火薬は大約其の二十倍の威力があるので、如何に猛烈なる爆發力



があるかは想像されやう。

それが、絶対に煙も出なければ、音響も發せぬと云ふのだから、我が陸海軍のこれに依つて得る利益はどの位であらうか。

是れまでの戦争と云へば、撃出す大小砲の音は百雷の一時に落つるが如く、硝煙は天地を鎖して、天日も爲めに暗しなど、形容されたものであるが、川瀬火薬を使用する利益はこの音も煙も無くなるので、戦争は尤も静かに行はれる。

即ち敵は我軍に攻撃されても、彈丸が命中して味方が損害を被るか、我が軍隊の姿を見ない事には、それと悟ることが出来ないの

だ。

殊に銃聲を尤も嫌ふ斥候戦などに於ては、我軍の利益と敵の不便とは限り知られぬものである。

川瀬博士は、此の大發明を完成すると同時に、引き続き他の發明の準備調査の爲め、世界漫遊の途に上ることゝなつた。

健兒は父が世界旅行の途に上ると聞いて、早速その書齋を襲ふた。

「父様——僕はお願ひがあります。」

「何んぢや？健兒の願ひとは？」



と博士は静かに顧みた。

それは、冬の静かな午後のことである。三時を過ぎた太陽はやゝ西へ廻りかけて、庭には風もなかつた。

健兒は、父様の方へ膝を前めて、

「父様は今度世界漫遊をなさるつて眞實ですか。」

「うむ、近々出發する意で今その準備中だ。」

「それで、お願いがあるんです。父様、僕も御一緒に連れて行ってくださいませんか。」

「お前も洋行したいと云ふか。」

「然うです、僕も是非英國へ行きたいと思ひます。」

「希望とあれば連れて行つても宜いが、お前はまた中學生だ！最う二三年は内地で勉強し、英語も十分に研究した上、此次ぎ洋行する時まで延期しては何うか。」

「父様のお言葉ですが、僕は英國のケンブリッチ大學へ留學したいと思つてるんです、何うぞ御無理でも連れて行つて下さい。」

と健兒の決心は岩よりも固い。

「お前はケンブリッチ大學へ入學したいと云ふのか、其考へは至極面白いが、まだ二三年は早やすぎるやうにも思はれる……。」



最初、博士は健兒が中學校を卒業せぬ内は連れて行かれぬと拒んだが、健兒が非常の熱心を以て再三懇望するので、然らば、世界漫遊の途中英國まで同道して、其處のケンブリッジ大學へ留學させやうと、首尾よくも其の願ひは許された。

健兒は平素からの理想通り、英國留學生となるを許されたので、其の喜びは想像以外だった。

父の博士が世界漫遊の途に上るには、準備や其他の都合上、約三週間ほどの隙があつた。この間を、元より中學校でも英語は得意だった健兒が、晝夜續けざまに勉強したので、英語の上達は目覺しい

ほどであつた。會話などは、大概の事は外國人を相手に、更に差支へることなく用を辨ずる事が出来るやうになつた。

川瀬博士が世界漫遊の途に上つたのは、その翌る年の花咲く頃であつた。

神戸港から出帆する郵船會社の太陽丸に乗組んだ川瀬博士と健兒は、上等船室の一つを占領して、茲でも健兒は一心不亂に英語を勉強した。



七 何處ぞで見た顔

神戸港を出帆した太陽丸の上等船客の大部分は、英國其他の歐洲人で、日本人は三分の一もなかつた。

川瀬博士は、健兒の英語の熟達の爲めに、乗込んだ其日から食堂へ出で、また上甲板の談話室へ健兒を連れて行つて、多くの外國人と交際するのであつたが、船客中に英國大使館の書記官がゐて、川瀬博士を世界的の大發明を遂げた大人物だと紹介したので、交際術に長けた歐洲人は、我れもくと先方から握手を求めた。

そして、英語を流暢に繰つり、萬事に抜目なく立働く健兒の快潤な動作は、忽ち船中の人氣者となつてしまつた。

風光明媚な瀬戸内海を過ぎて、玄海灘に出た時には、汽船の動揺も激しく、元氣に満ちた少年健兒も、多少弱つて船室に閉ぢ籠つたが、黄河の泥水が注ぐ爲めに、海水が黄色になつてゐる支那海へ來た頃には、船暈にもすつかり慣れて、舷側に噛む巨濤を却つて愉快だと喜ぶやうになつた。

上海に鳥渡寄港して、臺灣海峡へ出る頃までは、割合に平穩無事な航海を續け、何等の特記すべき事がなくて日を過ごした。この間



に、健兒の英語がますます、熟達して、交際する諸外人から親愛されるばかりであつた。

ある日――

澎湖島を煙波の間に望見すると云ふので、上甲板に上つた健兒が、今より二十五年前までは清國領であつたこの島が、我邦に占領された當時の事情などを想像して、慢ろに勇む胸を躍らせてゐると、船首の方から、足早に帆檣の方へ過ぎ行くもがあつた。

島影に見惚れてゐた健兒は、近くに來る人ありと氣が注いで、ふと其方を顧れば、先方でも、鳥渡歩調を緩めて健兒の方を見た。

その視線がひたと出逢ふた時、

「はてな!」

と健兒は小首を傾けた。

その水夫の顔――何處かで見覚えがある。

確かに見たやうではあるが、それが何處で出逢ふたものか、直ぐには記憶に上らなかつた。

先方の水夫も、また健兒の顔に見覚えがあるかして、その場に立ち止まつて凝然と此方を瞞めたが、それと心注ぐところがあつてか、  
「あッ」



と微かながら驚愕の叫びを洩らしたが、急に慌てた様子で、他を向いて足早に立去るのであつた。

「何者だらう？」

健兒は再び斯う不審の吐きを洩らして、水夫姿の後影を見送つたが、何うしても何者か思ひ出せないので、其儘船室の方へ降りて来た。

船室には、折から英國大使館の書記官が來訪して、父の博士を相手に世間話をしてゐた。

健兒もその仲間入した。

暫くすると、俄かに甲板の方に當つて立騒ぐ人の聲々。

「やア、暴風雨だ！暴風雨だ！」

——暴風雨の襲來と聞いて、真先に驚いた書記官は、顔を蒼白にして船室を飛出した。

川瀬博士は更に慌て騒ぐ様子もなく、静かに鐘を呼び寄せ、取散した卓の上を片付けるやうに命じて置き、健兒を連れて甲板に出た。



長航海に於ては、朝暮れ變化のない蒼海ばかり眺めて過す退屈さに、大人も子供に歸つて、輪投げのやうな單純な遊戯に嬉々とするくらゐであるから、まして元氣に満ちくた少年健兒には、脾肉の嘆が壓へ切れず、何か椿事あれかしと待ち構へてゐたところへ、暴風雨の襲來と聞いて、寧ろ躍り上つて喜んだ。

### 八 汽船は暗礁に乗揚げた

暴風雨!!! 暴風雨!!!

海上で遭遇する暴風雨は、少年の好奇心を以つて待ち構けたやう

な、そんな生優しいものであらうか!?

父の博士と共に、健兒が甲板へ飛び出した時には、甲板は戦争の始まる時のやうな大混雜であつた。

多くの船員水夫達は、船長以下、運轉手等の指揮に従つて、高い帆檣へ昇つて、帆の捲き下しや其他の準備に立働いてゐる——船客の大部分も此處へ集まつて來た。

今の今まで晴れ渡つてゐた蒼空は、見る／＼薄墨を流したやうに搔曇つて、極く軽く吹いてゐた北風は一時に止んで、捲き残された帆布がバタリバタリと翻めいてゐる。



數度の航海に經驗のある船客ほど、この險惡な天候に不安の念を抱き、汽船が今にも轉覆でもするかのやうに心配して居る。ガヤガヤと語り合ひながら、交代に船長のところへ赴き、氣壓が何うだとか、汽船の位置が何の邊にあるかなどと五月蠅く聞いてゐた船客の一團は、やがて帆檣へ衝突かつて高鳴りする一陣の強風が、ポツリポツリと大粒な雨を誘つて襲ひ出したに驚き、各自の船室へ逃込んでしまつた。

雨が激しくなるに連れて、風はますます吹き荒んで來た。油を流したやうに静かだつた海上は、巨濤を起して、白い泡を捲

上げながら、小山のやうなのが汽船を目蒐けて襲ふ。

この巨濤に遭つては、さしにも九千幾百噸の太陽丸も、恰も木の葉の如く激しく動搖するのだ。

或時は九天の上へ投上げらるゝかと思へば、忽ち千仞の海底深く投込まれるのである。

暴風雨は續いた。

全速力を以て進航を續ける太陽丸は、船長の觀側するところに依れば、まだ幾何も進行して居らぬ。猶、この先幾晝夜續くか解らぬと云ふので、船長は澎湖島の島影へ避難することにして、汽船の方



向を轉じた。

この頃から汽船は全く暴風雨の中止地帯に進入したのであらう。風雨はますます甚だしく、荒れに荒れて、狂ひに狂ふ巨濤激浪は、汽船の甲板をも打越すので、船員や水夫は必死となつて、ボート其他の船具を奪ひ去られぬやうにと奔走してゐる。

今や船客は一人残らず船室に閉ぢ籠つて、動搖の爲めに轉がり落ちぬやうに、寢臺に身體を縛りつけたまゝ、半死半生の體で横つてゐるのだ。

その中でも、一室に大勢雜居してゐる三等船室の光景は、現世か

らなる修羅地獄の實に慘憺たるものである。

手に手に小さなバケツトを抱えて、嘔吐するもの、泣き叫ぶもの、潮水の浸入を恐れて、窓と云ふ窓は全部締切つてあるので、堆積した炭酸瓦斯や嘔吐した汚物の臭氣で、汽船に暈はぬものまでが、病人になりさうな體たらくである。

健兒は、この時になるまで少しも汽船に酔はぬので、船中の彼方此方と飛び廻つて、是等の慘憺たる人達を慰めたり、或ひは甲板へ上つて船員の手傳ひなぞして、ますます元氣に働いてゐたが、汽船は漸くの事で澎湖島近くへ着いて、島と島との間に避難すべく、島



の鼻を迂回しやうとした。

風速四十米突以上の颶風の中では、如何に操縦術に巧妙なる船長と雖も、汽船は自由になるものでない。巨濤と闘ひ、颶風に逆らひながら、漸く此處まで進行を續けたのではあるが——萬事休す！最う一息と云ふところで、無慘や、汽船は暗礁に乗り上げてしまつた。轟然たる大音響は、現世の終りを告げるやうに轟き渡ると共に、死せるが如くなつて船室に蠢動して居た病人まで一齊に飛起き、甲板を指して駆け集つた。

此時早く、船員は直ちに數臺のポンプに着いて浸水の汲出しに掛

つたが、劔の刃を植並べたる如き暗礁に乗り上げた船底は、こゝに大破損を蒙つて、海水は瀧のやうな勢ひでドンドン浸入するので、高の知れたポンプ位では到底汲み出しきれぬ。

それに、刻々甲板を打越すやうな、巨濤が襲ひ來ては、暗礁上に横つた汽船を揺るので、船底の破損箇所はますます大きくなるばかり、今は汽船を無事に引卸すべき見込みがなくなつた。

船長は遂ひにポートを卸して、乗客を救助せよと命じた。

そして、ポートに乗るものは、先づ婦人少年から始められると云ふので、多くの人達は争つて甲板の一方へ馳せつどふた。



無節制の乗客の混雑を防止する爲めに、船長はピストルを持って船橋に立つてゐる。

思ひ／＼に身邊の物を携へた乗客が、我先にボートに乘移らんと犇めき合ふ態は、恰も野獸の噛み合ふやうで淺間しい。

その中でも、獨逸人、支那人等は、無暗に先を争つて見苦しい眞似をするが、さすがに紳士國を以て世界に誇つてゐるだけ、英國人は尤も靜蕭を保つて、自分の乗る順番を待つてゐる。

川瀬博士と健兒は、この時必要な物品を身につけて、甲板に取つて返し、この騒ぎを苦々しげに、遠くへ退つて眺めてゐたが、婦人

客が乗つてしまふ三艘目のボートが、未だ一人乗る席があると見たので、船長は四邊を見廻してゐたが、遠くに離れてゐる健兒を認めて、

「少年がまだ一人残つてゐた——貴君早くお乗りなさい」と手招きした。

然し、健兒は父博士に離れて、我れのみ救助されることを肯んぜず、

「いや、僕は少年ぢややない！」

と答へて其方へ赴かんとしなかつた。



船長は再三健兒に乗船をすゝめても肯かぬので、仕方なく、

「誰かもう一人だけ……」

と呼ぶや、待ちかねてゐた四五人の獨逸人は、何れも先を争ふてボートへ乗移らうとする。

これだけ一時に乗れば、ボートは平均を失ひ、忽ち顛覆する怖れがあるので、

「可かん！可かん！」

と船長は叫びながら、ピストルを上げて制止し、

「もう可し！其儘でボートを出せ！」

と命じた時、船室に取残されてゐた一人の日本婦人が馳せ來たつたので、直ちにこれに乗移らせ、ボートは陸地へ向つて漕ぎ出されたのであつた。

### 九 意外なる救助者

汽船の運命は刻々に切迫した。

船首を天に冲して、船尾の方から次第に沈み出した……もう一浪大きなのに衝突かられば、其れきり沈没は免かれぬところである。



この間にボートは尙ほ幾艘か卸された。

そして、その度毎に、我先にと乗船を急ぐ船客の混雑はますます甚だしく、五度目に出されたボートの如きは、船員の制止も聞かず、餘り多勢が一時に飛乗つた爲め、本船から七八間も離れるか離れぬに、憐れや怒濤の間に顛覆してしまつた。

寸刻を争つて乗移つたボートが、今や沈没せんとしつゝ、ある本船に取残されたものより、先に死んで行くべく、泡立つ激浪の間に浮きつ沈みつ、救助を救める悲鳴を擧げて苦しみ藻掻く人々を、健兒はつくづく哀れみの眼を以て見遣つた。

愈よ最後のボートが卸ろされた。

乗客の救助は、船長以下の乗込員が必死と勉めたので、非常に迅速に行はれて、今は三十人ほどの船客と船員ばかりが残つたのだ。

最初に陸地に向つたボートが漕ぎ戻らない限りは、汽船にはこれ一艘のみである。

まづ乗客を乗せて、船員も乗れるだけこれに乗り、餘の船長以下大部分の船員は、汽船と運命を共にしやうと云ふのだ。

船客はそれ／＼ボートに乗移つた。船員の誰彼も乗移つて、本船を離れて漕ぎ出した。陸までは大凡二海里ほどある。



川瀬博士と健兒が移つた最後のポートが、本船から十間以上も漕  
ぎ離れたと思ふ頃本船の最期は來た。

怪い大音響!

愕然と思つて顧へる間に、汽船は船首を天に沖して殆ど直立の形  
になつたのも一瞬間——そのまゝ、逆巻く浪の中へ沈没して、九千何  
百噸の巨船も、その雄姿を海底深く吸ひ込まれてしまつた。

そして、海上に泡立つた荒浪が、渦を巻いて一頻り騒ぎ立つたが、  
荷物や、船員の漂流するのと、跡は怒濤の徒らに寄せては返すばか  
り……

凄惨なる活劇は起つた。

最後まで本船へ残つた船長以下の面々は、いよいよ汽船が沈没  
——と覺悟するや、思ひ／＼に救命器を携へて海中へ飛込んだので  
ある。

この悲慘しい光景を後に眺めながら、ポートが約一哩も陸地を指  
して漕ぎ進んだ時、横様に轟然と打寄せた怒濤を啖つて、無慘! 遂  
ひにポートは顛覆した。

「呀!」

と言ふ間もなく、海中へ突落された健兒は、



「——父様！父様！」

聲を限りに父博士を呼びながら、夢中で手足を働かして泳いだ。

最期は父と一緒にと覺悟してゐたのが、残念ながら、今は父の安

否を問ふ間もない。

誰彼も一様に巨浪に吞込まれてしまつたので、父は子を探す事も

出来ず、子は親を求める暇もなくて、陸地を指して泳ぐのであつた

が、陸へは未だ一哩あまりもあるのだ。

東京で中學校通ひしてゐた頃、水泳のチャンピオンなどと云つて

も、高が隅田川の波も何も無いところで泳いだぐらゐなものであ

る。それを山成す怒濤が寄せては返す荒海のうちを、而も二月上旬の、尤も寒氣激しい期節であるから、如何に勇氣は充滿ちてゐても、健兒は殆んど手足も凍えるやうで、何んとして意のまゝに泳がれやうか。

「え、俺は日本男兒だ。こんな海で死んでたまるもんか。」

と健兒は勇氣を振り起して、陸地と思はるゝ方を指して、一生懸命に泳ぐのだが、激しく襲ふ寒氣の爲めに、今は泳ぐべき力も抜け

果てた時、直ぐ健兒の後方の波間から、

「——捉まれ！これへ捉まれ！」



と叫ぶものがあつた。

その救助の叫びに、健兒は更に元氣を盛返し、

「誰だ！君は。」

と言ひながら、其方へ泳ぎ着くと、それは救命器を持つた一人の水夫だ。

「何んでも可いから早くこれへ捉まれ！」

「——有難う。」

健兒は辛くも救命器に取縋つた。さうして、その救ひの主を見ると、今日何處やらで見覚えのある顔だなとは思ひながら、遂ひに思

ひ出せなかつた彼の水夫であつた。

「さあ、これへ捉つてれば大丈夫だ！少しぐらゐの寒氣は辛抱しなさい、屹度お前を助けて遣るから……」

彼の怪しき水夫は、健兒の捉つてゐる救命器の端を握り、陸地を目蒐けて勇ましくも泳ぎ出した。

健兒は、この意外なる救助者を得て、漸く陸地へ着くことが出来た。

その途中泳いでゐながらも、自分を助けてくれたこの水夫は何者かと頭腦を悩ませたが、陸へ着くと同時に、



「お、然うだ！」

とばかり躍上つて叫んだ。

「君は……去年の秋、目黒の山林中に出遭つた……」

「貴方は未だ彼の時のことを覚えてますかい。」

と水夫は落着いた聲で、

「確かに彼の時の悪漢は手前なんです。」

と言ひ足した。

健兒は今しも危き生命を救はれたその禮を言ふも忘れて、つくづ

く水夫の髻面を見詰めた。

——自分(じぶん)は彼(かれ)が折角(せつかく)少女(せうじゆ)お菊(きく)から強奪(がうたつ)した金(かね)を取戻(とりもど)したのである。されば、我(わ)れ川瀬(かわせ)健兒(けんぢ)に對(たい)して怨(うら)みこそあれ、他(た)に何(なに)んの因縁(いんえん)もない自分(じぶん)を、然(しか)も、先刻(せんこく)本船(ほんせん)で自分(じぶん)の見(み)たことであるから、確(たし)かにその折(をり)の自分(じぶん)と承知(しょうち)してゐて助(たす)けてくれるとは……猶更(なほさら)に其意(そのい)を得(う)るに苦(くる)しむ所(ところ)だ。

こんな事(こと)を思(おも)ひながらも、健兒(けんぢ)は何(なに)よりも第一(だいいち)に父博士(ち、はかせ)の安危(あんき)が氣遣(きづか)はれので、萬一(まんいち)、自分(じぶん)より先(さき)に泳(り)ぎ着(つ)いて居(を)られはしないかと四邊(あたり)を顧(み)るのであつた。

水夫(すゐふ)は、健兒(けんぢ)が氣遣(きづか)はしげなる様子(やうす)を見て取(と)り、



「貴方は父様のことを御心配の様子ですが、大丈夫！今に此處へ泳ぎつかれますよ。」

斯う慰めたが、更に言葉を次いで、

「手前が貴方をお助けする前に、主のない救命器を拾つたので、それを差上げて置いたから、もう懸て泳ぎ着かれるでせう。」

と言ふ間もあらせず、川瀬博士も續いて其處へ泳ぎ上つた。

海岸では、沖に難船があるを認めて、士人が集まつてガヤガヤ立騒いでゐる。その中には官吏らしい日本人も立ち混つて、救助策を講じてゐるらしかつた。

### 一〇 忠僕荒井剛助を得た

漸く陸へ泳ぎ着いた三人とも、長い時間、激浪怒濤と悪戦苦闘を續けたので、其體は綿のやうに激しく疲れてゐた。

張りつめてゐた氣が急に弛んだので、川瀬博士の如きは陸へ着くなり、ばたりと砂の上へ倒れてしまつた程である。

海岸へ漂着する者を救助する一隊であらう、日本人に卒ゐられた数名の士人は、健兒等が泳ぎ着いたのを遠くから見ると、直ぐに此處へ走つて来て、ドンドン焚火をしてある處へ連れて行つて、體を



温めさせたり、濡れた衣服を乾かせたり、また薬などを服ませてくれたので、漸く人心地つく事が出来た。

この附近にはボートで上陸したもの、辛くも泳ぎ着いたものなどが、何時の間にか四五十人ほど集まつた。

海は未だ浪が高いが、さしもの風雨も大分鎮まつた模様、島の日本人はもう大丈夫だと云ふので、土人を狩集めて救助船を仕立て、勇ましくも海上に漂流してゐる人々を助けに出掛けた。

漸く人心地ついた健兒は、これも熱心に衣服を焚火で乾燥してゐる、父博士の側へ寄つて來た。

「父様御無事でお目出度う。」

「お、健兒！お互ひに無事で結構だつた。俺は泳ぎながらも、お前が何うしてゐるか、そればかりを非常に心配してゐたが、斯うして九死のうちより一生を得て、親子が無事な顔を合せることができたのは喜ばしい。」

と博士は眞から嬉しさうだ。

健兒は彼の水夫を顧つて、

「父様！僕が無事で陸へ泳ぎ着いたのは、決して自分の力ぢやありません、ここに居る水夫が海上で助けて呉れたんです。」



と紹介す。

博士は驚き顔に言つた。

「何？お前を助けてくれたのはこの水夫か。」

「え、然うです。」

博士は、先刻から健兒の傍に在つた水夫を知つては居るが、單に一つ場所へ泳ぎ着いた遭難者の一人とばかり思つてゐたので、別に言葉も掛けずに居た。

然るに、健兒の話では、その水夫が危い生命を助けてくれた大恩人であると云ふのである。

「お、其れとは更に知らずに居つた爲め、今まで挨拶もせず飛んだ失禮をした。」

と博士は、彼の水夫の方へ歩み寄つた。

「君が健兒の危いところをお助けくださつたさうな、何んとも感謝の致しやうがない。」

「いや、お言葉でも恐入ります……」

と水夫は忸怩。

博士は水夫の髯面を凝然と瞞めたが、

「やッ君は……」



と再び驚いたらしく、

「先刻海上で、俺に救命器を與へられたのは——確かに君のやうであつたな。」

「博士！」

水夫は慢り氣もなく、

「それは手前でございます。」

と頷くのであつた。

「すると、君は吾々親子の眞なる救助主だ！」

博士は感謝に涙さへ浮めて、彼の水夫の荒くれた手を犂と握緊め

た。

「御町重なお言葉では恐入ります。」

水夫はますます、恐縮の體で、

「遭難者を助けるのは、水夫の天職でございます！決して慢るところではありません。」

「いや、然うでない！」

と博士は靜かに頭を掉つて、

「如彼して汽船が沈没した場合、誰しも我が一身の保護に急々たるに、君は吾々親子を救助してくれたのは、實に見上げた心掛けであ



る。萬一、彼の場合に、君と云ふ勇者が現はれねば、吾々は海底の藻屑となつてしまはねば成らんのだ。」

「何んにしてもお互に無事で結構でございました。手前は、始めて人から喜ばれるやうなことをしましたが、人を泣かせ怨まれるよりは餘程愉快なものです。」

と水夫は何處までも謙讓して言つた。

「あゝその高潔なる精神は、水夫などさせて置くに惜しい位だ。」

と博士は心から感嘆したが、やがて言葉を改めて、

「それで、吾々を川瀬親子と知つて助けてくれたのか、或ひは偶然

に救ふてくれたのか。」

と聞く。

「手前は——川瀬博士とその若様と知つてお助け申したんです。」

「何？吾々を川瀬親子と知つて……」

「はい、お仰せの通りです。」

「うむ、君は何うして俺を知つて居るか。」

「今度汽船で始めて博士にはお目にかゝりましたが、若様は疾うから存じてゐます。」

「健兒を！」



博士は益々不審顔で、

「東京で知己なのか。」

「それも、實に不思議な場所で御面會しましたので……。」

とまでは言つたが、水夫は其の事情は如何にも語るを好まぬ様子であつた。

「健兒！」

博士は我が子呼びかけた。

「お前は——この水夫を知つてゐるのか。」

「えい。」

健兒は返答に窮つた。

「うむ、矢張知つて居ると云ふのだな、何うして東京で知己になつたか、其の事情を父様に話してくれ。」

「——それは些と困つたなあ。」

健兒は如何にも窮つたらしく水夫の顔を見た。

水夫は俯いたまゝ黙つてゐる。

博士の好奇心は動いた。

「何も遠慮する事はない、其の事情を父様に打明けてくれ。」

「ちや、何事も隠さずにお話します。」



健兒は父博士の方に向つて、

「彼れは去年の秋の事でした、父様がいよく火薬の御發明が出来たと、房州から麻布の母様の許へ電報をお寄越しなすつた日でした。その日は丁度日曜だったので、僕は山下の巖君と一緒に、朝から目黒の先まで銃獵に出掛けたんです。」

「うむ、その時お前が撃つて来た鳥は、父様が久し振で房州から戻つて御馳走になつた覚えがあるよ。」

と博士は笑ましげに喙を容れた。

健兒は、その日の歸途、目黒の山林中で起つた出来事の一部始終

を物語つた。

斯う健兒から何事もつゝまず打明けられた水夫は、今はその身の上を秘密にしておく必要がないので、

「唯今若様からお話があつた通り、其時の悪漢は確かに手前でした。それまでに、随分悪事も致しましたが、反對に酷い目に遭はされたのは始めてです。そこで、其場を逃げ歸つてから手前もつくづく考へました。俺は悪事を働いた爲め、覆面を剝ぎ取られて顔を見られるやうな恥辱めを受けた。人間と生れて、白晝顔を晒して歩くことの出来ぬやうになつたのも、全く自分の心掛が悪い爲めだ！」



切めて人間も生れた以上再びこんな恥辱を受けたくないと思ひ、其時かぎりフツ、リと悪事を廢め、郵船會社の汽船に水夫となつて乗込み、眞面目に働く事となつたんです。これと云ふのも、若様の爲めに眞人間になり得たのだから、何時か御恩返しをしようと思ひ掛けてゐたんです。所が、神戸から汽船にお乗込みなさるお姿を見ました。お言葉を掛ける機會がなかつたので、その儘に打過ぎて居るうち、計らずも今日の大暴風雨で汽船が沈没しました。この時こそ御恩返しする折と思ひ、日頃の望み通りお親子をお助け出来たのは神様に感謝するところであります。」

と形を正して述べ終つた。  
それを聞取つた博士は、益す感服するばかりで、  
「一度悪事を働いたものは、容易に善心に立返ることが出来ぬものだ！それを、君は健兒の爲めに善人になつたとは何より喜ばしい。然う云ふ美しい心掛けのものを、毎までも水夫にしておくのは、砂漠中にダイヤモンドを埋めて置くやうなものである。而も吾々親子はお前のために危き生命を救はれた恩義もあるから、お前の望みに依つては、世界漫遊の供に連れて行つて遣らう。お前にその望みはないか。」



と訊くのであつた。

水夫は喜びに聲を顫はせた。

「では、手前に博士のお供をさせてくださるんで!」

「無論! お前の希望に任せやう。」

「有難うございます。さう願へれば手前もどんなに嬉しいか知りま

せん! 何分宜しく願ひます。」

と水夫の喜びは一通りでない。

「可! さう云ふ事にしやう。」

博士も甚だ満足の體で、

「お前の名は何んと云ふか。」

「荒井剛助と申して、故郷は信州の長野在であります。」

「何! 信州だと。」

「はい。」

「俺の先祖も信州の出身だ! 同じ信州であれば何彼に就けて双方の

好都合である、今日から主従の契約しやう。」

と博士は快く頷いた。

「若様!」

水夫は健兒の足下に跪いて、



「これも總て貴君の賜物です、有難くお禮を申します。」  
と感謝の涙に咽ぶ。

健兒の愉快も無上である。

「僕も嬉しい！父様や僕と一緒に前が世界漫遊の供をしてくれ、  
ば、甚麼に心丈夫だか知れないから……」

## 一 一 阿弗利加觀光團組織

其夜、汽船から上つたものは、島の日本官憲の爲めにそれぐ救  
助されて、役場や學校なぞへ收容された。

川瀬博士と健兒は、思はぬ難船に、旅行の仕度も何も滅茶々に  
されたので、荒井剛助を連れて一旦上海へ歸つた。此處で更に旅装  
を調べて、世界漫遊の途に上らうとするのだ。

上海に引還した川瀬博士は、此處でまた充分に要意し、健兒と剛  
助を伴ひ、改めて歐州行き汽船に乗込んだのである。

そして、今度は極く平穩な航海を續けて、香港、シンガポール、  
馬拉加、彼南、古倫母等の未だ見ぬ國々の港に寄港しながら、三月  
の下旬に蘇士の運河を通過して、坡西土へ着いた。

東西兩洋の境界をなして居る、蘇士の運河を越えて此處へ來れば、



四邊の山川から人情風俗まで全然變つて、殆んど別世界へ來た思ひがする。

歐洲人は健兒も見飽きてゐるが、歐羅巴の領土を全部失つた土耳其人、亞利比亞人、埃及人、最近數回の戦争で勇敢無双の名を得た希臘の國々の人等、中學の教科書の中で親んでゐた各國の人民が雜然と入込んで、それ／＼生業に就いて居る奇觀は、健兒をして思はず「人種展覽會」を見るやうだと叫ばしむる程珍奇なものであつた。

此處で、汽船は半日ほど碇泊してゐるので、着船と同時に、父博

士に暫時の暇を貰ひ、剛助を連れて見物に上陸した健兒が、出發時間までには少し時間があるやうに歸つて見れば、父の博士は荷物全部を片付けて甲板に出でゐられた。

「唯今！」

健兒は父の傍に前み寄つた。

「父様、荷物を片付けて何うするんです？ 此處へ御上陸なさるんですか。」

「實は急に愉快なことが出來た。」

と博士は笑ましげに言つた。



「お前達が見物に上陸した後で、同船の英國人から誘はれて、ナイル河を溯る河蒸汽に乗つて埃及から、亞弗利加の内地を見物する」といふのだ。」

ナイル河の上流には、鱷魚も居る、内地には獅子、阿弗利加虎、其他の猛獸も無數にゐる。

嘗て、冒險小説で讀んだことのある回々教徒、虐殺した人の髪の毛を刀の柄に飾ると云ふ野蠻人等、阿弗利加は少年の好奇心を惹く可く充分である。

それを、今健兒が、父の博士から急に見物に行くぞと聞かされた

のであるから、喜びやうは譬へる言葉もない。

健兒や剛助が不在の間に、父が悉く準備をして置いてくれたので、直ぐに今乗つて來たボートで陸地へ引返した。

埃及内地到るところに散在する三尖塔、またはスヒンクスの見物、砂漠の中へ山の如き巨大の三尖塔は、三千年以上もその往昔、この國の國王の墓として築かれたもの、またスヒンクスは長い間何んの爲めに築かれたか、解く由もない謎として残つてゐたのが、これは



當時日の神を祭る爲めに建てられた殿堂であることが、漸く最近に  
発見されたとは健兒も聞いてゐたけど、親しく見る内部の構造や、  
結構の偉大なものには今更のやうに驚かされた。

尙ほピラミットや、スフィンクスの建築とは時代が違ふが、之れも  
二千年以上も経つた古代の建築、それらに残つてゐる古美術品等に  
も、今は亡國の有様となつてゐる埃及の砂漠の中にも、往昔はこれ  
だけの文化が開けて居たかと思へば、國家の盛衰や興亡に就いても  
更に新たな感慨が浮んで来る。

川瀬博士や健兒に僕の剛造、其他の坡西土で臨時に組織された阿

フリカ加觀光團は、埃及内地を一通り見物したので、いよいよナイ  
ル河を溯る河蒸汽に乗つて、阿フリカの内地へ深く向つた。

汽船はナイル河の上流へ溯るので、極く小形な、そして吃水の  
浅いものであつた。一行十三人を乗せて丁度である。

東洋と南洋の接觸點、坡西土で組織された觀光團だけに、その顔  
振れは千差萬別、殆んど世界各国の人々を集めてある。即ち種類分  
けしてみれば、

- |    |      |        |        |
|----|------|--------|--------|
| 日本 | 川瀬直人 | (理學博士) | (四十七歳) |
| 同  | 川瀬健兒 | (學生)   | (十六歳)  |







一一 熱血少年の愛國論

熱帯地方の旅客には、夜は眞の安樂境である。

日のうちは、砂に照りつけて反射する日光の熱さは足も焼けるほどだ。

時候は未だ四月の、故國では櫻の花の眞盛りだと云ふに、亞弗利加内地では、暑中八月の頃よりも尙ほ暑い。

それが、太陽が一度び限りもない砂漠の地平線上に没して、夜の幕が四邊を掩ふやうになつては、夏服で尙ほぢりぢり汗ばむ日中に

引替へて、冬服を着て丁度よいくらゐである。

「いや、急に涼しくなりましたな、これからは吾々の天下です。」

「左様、百萬の敵に攻められるより、晝間太陽に照りつけられる方が餘程防ぎ難い。然し、斯うして夜になれば、亞弗利加も案外極樂淨土ですな。」

「さあ、斯うなると急に元氣が出て来るが、余り薄着してると風邪を引込みますから、誰方もオバーコトをお忘れなさらんやうに。」  
「は、は、は、これでは盆と正月が一緒に来た感があります。」

——と異口同音に笑ひ興する。



事實、河蒸汽に乗つてゐる氣樂さは格別だ。猛獸に襲はれる心配もなければ、焼くが如き炎熱に苦しめらるゝ事もなく、團員一同、甲板に集つて夜更くるまで、珈琲の香ばしいのを啜りながら、各自のお國自慢やら、旅行中の見聞した事などを語合ふのである。今夜もまた例の如く甲板に集つて、四方山の談話に夜の更くるまでゐたが、月の光りは晝よりも尙ほ明るく照してゐるので、殊更にアセチリン瓦斯の燈火を消して、談話はそれからそれへと、興はいよゝゝ増すばかりであつた。

この亞弗利加觀光團員中、英國人が尤も數多いが、そのうちにも

エス大佐は、南柯戦争に従軍して勇名を轟かしたことがある老軍人で、眞白な鬚髯の奥に堅く結ばれた唇は、滅多に開いたことなく、何時も沈黙を守つてゐるが、その犯し難い威嚴のうちにも、何處かに人を引着ける親しみもあつて、一行中の最年長者ではあり、皆のものから多大の尊敬を拂はれてゐた。

おなじ英國人のピー氏は、純然たる英國の若紳士で、社交もなか／＼長じて居り、談話も上手で、この一行中、獨逸のケー外交官と共に、尤も多く談じ笑ふ方である。

今夜もこの兩人が、談話の中心となつて、種々な問題に就て各自



の意見を交換してゐたが、外交上の問題から話題は遂ひに東洋人の事に飛火がして、白色人と黄色人との能力が異つてゐるとケー外交官が主張すれば、ビー氏は躍起となつて、我が同盟國たる日本人を見よ、尤も多く文明の利器を利用する近世の戦争に於て、一撃の下に露西亞を破つたのは、明らかに黄色人の能力を發揮したものではないか。其他、平時の彼等の生活に於ても、何處に歐米人に劣るところがあるかと反對するのであつた。

ケー外交官はまた、日本人は模倣に長じた國民であつて、猿が人の真似をするやうなもので、彼等には發明の能力が無い。また心

から文明國民の道徳を守ることの出来ない結果は、公德心に缺けて居り、外交上にも商業上にも徳義が行はれて居らぬ。彼等が戦争に強いのは、野蠻人が死を恐れないと同一で取るに足らぬなぞと、盛んに日本人を罵つて自分の説を主張してゐる。

健兒は此談を聞いて、最う我慢が爲切れなくなつた。

父の博士が頻りに目授で制するのであるが、談話の行きが、り上とは云へ、ケー外交官が平素の如才なきに似合はず、日本人を側に置いて、口穢なく罵倒するので、他の人達も餘のことに呆れ返つて川瀬博士や健兒の顔をさも氣の毒さうに窺つて居た。



博士は唯微笑して、ケー外交官の罵倒に空耳を走らせてゐたが、血氣に逸る健兒は何條沈黙のみ守つてゐられやうか。

「ケー外交官！」

と叫んで其方へ椅子を突進すめた。

「貴下は我々を日本人と承知して、先刻から罵倒なすつてるのですか。」

ケー外交官は、ちろりと健兒を見遣つたが、如何にも傲慢なる態度で、

「うむ、然うであつたら何うする？」

と冷酷に言ひ放つた。

健兒の眼を星の如く輝いて、

「無禮な言はお謹みなさい！日本は建國以來二千六百年の古い國ですぞ。そして、萬世一系の皇統を上に戴いてゐる。數百年前若くは千年前の日本の文明は、當時の西洋各國の文明とを比較したら何方が劣つて居るでせう？今、日本を罵倒された貴下の國獨逸の如きは、蒙古の沙漠附近を彷徨してゐる蒙古人と同様、まだ國家を有つてゐなかつたでせう。」

と獨逸人の急所を突いた。



「失敬千萬な！」

今度はケー外交官が赫となつて、

「その往古如何なる文明を持つて居たにせよ、この埃及が數千年前に美術工藝が發達してゐたにせよ、今は亡國となつて何んの誇るところもないやうに少しも價値がないものだ！」

と、健兒を少年と侮つて罵り返す。

健兒は愈よ憤つた。

「日本は何時亡國となりましたか？ 建國以來益す進歩發達するばかりで、遂ひに今日世界の一等國とまでなつた。唯、其間三百年來の

政策上鎖國主義を取つたので、文明の發達が専ら精神的方面に向つて、物質的方面が多少歐米よりも後れた丈けである。」

ケー外交官の暴論を、根底から説破した健兒は、更に論旨を進めて、

「その證據には、明治維新開國して以來、僅々三四十年の短時日に西洋の文明を全部了解し且つ利用することが出来たのである。内に蓄へたものがなくて、何うしてこの大事業を爲す事が出来るでせう。模倣好きな國民と呼ばれるのは、こんな事情の下にあつた日本人の止むを得ない事であるが、發明心が無いとは云はさぬ。醫學上、



兵事上、日本人が單獨で又は西洋人と共同して有用な發明を遂げたことは限りがありません。

と一々例證を上げた。

「現に自分の父なる……」

——發明した無煙無聲火薬は——と言はうとする時、父の博士が、激しく健兒の腕を突いて止めよと制するので、素早く議論を組み直して、

「父なども實見したが、臺灣沖でこの二月難船した時など、英國人、日本人等の立派な動作に引替へて、獨逸人が尤も卑劣な行動をし、

德義心も何もない事を示したのから見れば、獨逸人こそ德義心のない人種と云ふを得ませう。」

殆んど十六や十七の少年の議論とは思はれぬほど、武步堂々と論じ立てるので、他の團員一同は、健兒の言ふ事に服し、鳴を鎮めて聞いてゐたのが一齊に拍手喝采した。

殊に、日本最氣のビー氏の如きは、唯もう大喜びで、健兒の議論の進む毎に、

「イエス！イエス！」

と連發して聲援を與へるのであつた。



## 一三 奇怪なるピストルの威力

誰れしも自分の邦を愛する心に變りはないものだ。

健兒が、獨逸人と英國人の議論を、突然横合から買つて出たのも、熱誠なる愛國心から起つたものであるが、獨逸のケー外交官にも矢張りこの愛國心はあつた。

そして、今しも健兒が、臺灣沖で難船した時の實例を舉げて、

「獨逸人には徳義心が無い！」

と言ひ返すや、

「何を無禮な！」

とばかり、最初、自分が口穢く日本人を罵つたことを忘れ、眞赤になつて怒り出した。

「我が獨逸國民に徳義心がないとは以ての外の暴言だ、獨逸は世界に誇る學術の發達した國である、それを徳義心がないとは聞き捨てならぬ。」

相手の憤怒ほど健兒はますます沈着な態度で言つた。

「獨逸が學術に發達した國ならば、日本もそれに優るとも劣らず總ての點に大發達をしてゐます。殊に日本には世界無双の大和魂と云



ふ寶があつて、それが戦争にも強い原因なら平時に於ては立派な徳義心ともなります。お氣の毒だが、獨逸には大和魂に比較すべき國寶がありますか。」

「いや、獨逸人には獨逸魂がある。その獨逸魂は愛國心の魂であるから、日本少年が今の失言を取消さぬに於ては、此方に相當なる覺悟がある。」

と威丈け高になつて詰寄るのだ。

健兒は相手が激昂する程落着いて、

「失言だから取消せと言はれるなら、それは御要求に應じもしやう

が、その代り貴下が最初日本人を罵つたから取消しなさい。」

「いや、僕は日本人を罵倒した覚えがない。たゞ事實を事實として論じたばかりだ、それが何の失言であらう。」

とケー外交官は我が失言を非認した。

「宜しい！ 貴下が日本人を罵倒したのが失言でないと言はるなら、無論、僕の方でも謝罪すべき理由がない。」

「何故無い？ 今の暴言を忘れたか。」

健兒は獨逸人の無法には呆れた。いや、寧ろその愚を憐れんだ。けれど、この儘では笑つて済まされぬので、



「自分は實見した實例を擧げて、貴下のやうに一部分を見て日本人の徳義心が無いと云ふなら、獨逸人にも徳義心が無いと稱はれると言つたので、失言でも虚構な言を弄したのででもない。」

と一言の下に跳ね付けた。  
すると、英國人のビー氏も、

「臺灣沖に於ける難船當時の、見苦しい獨逸人の行動は、その陋劣真に唾棄すべきものであると、上海の英字新聞に出てゐた。」

と健兒に聲援した。

ケー外交官はますます怒つた。

衆人環視のうちで、少年の健兒に言ひつめられた自分の恥辱を隠さう爲めでもあらうが、

「是が非でも今の失言を取消さねば、男子らしく決闘しろ。」  
とまで言ひ出でた。

健兒は未だ十六歳の少年である。その少年を相手に決闘を迫る獨逸人は、決して正氣の沙汰とは思はれなかつた。

こんな無法漢を相手に決闘などするのは、真に愚の至りではあるが、先方から決闘を申込まれて、それを謝絶するのは日本男兒の大なる屈辱とする處である。



健兒は直ちに快諾しやうと思つたが、父の博士の心を圖りかねて、  
「古來日本は武勇を尊ぶ國體であるから、敵に後方を見せるやうな  
卑怯はせんが……」

と言ひつゝ、其方を見た。

川瀬博士は、最前からの爭論を聞きながら、顔の筋肉一つ動かさ  
ず、何處までも平然として微笑を湛えてゐた。

「卑怯でなくば決闘しろッ。」

とケー外交官は言足鋭く迫つた。

「宜しい！」

健兒は冷然たる豪氣で、

「御希望通り決闘しやう。」

と言ひ放つ。

「何? いや、決闘するか。」

と聊か案に相違の面相。

決闘——と言つて威喝したら、直ぐにも膝を屈し、先刻の失言を  
取消して謝罪するだらうと思つたのが、意外にも潔く承諾されたの  
で、ケー外交官は尠なからず面喰つた形である。

併し、自分から決闘を申込んだ以上、今更その取消しは出来な



い。

殊に決闘の相手が十六歳の一少年であるから、萬分一にも負ける憂ひはないので。

「それなら、明日上陸して速かに決闘することを約すぞ。」と傲然として言つた。

「日本人は二枚舌を使はない！」と健兒も肩を聳かせた。

「毎何時でも異存はない。」

「堅く契約した。」

ケー外交官は、健兒の鼻先へ大きな手を突出した。健兒は、その手を握らんとした。

——決闘の契約はこの握手に依つて堅く結ばれんとするのである。

高が知れた獨逸人——假令死ぬまでも決闘して、痛快なる日本少年の勇氣を示してくれんものと、これが健兒の意氣だ。

今や兩人が握手せんとする時、最初から黙々として二人の議論を聞いてゐた英國のエス大佐が、

「ケー外交官——待ちなさい。」



と不意に喉を入れた。

「何か御用か。」

握手せんと差出した手を引きながら、ケー外交官は大佐の方を顧つた。

「左様、御注意までに申すことがある。」

エス大佐は炯々たる眼光に獨逸人を睨み据ゑて、

「貴下は獨逸紳士の摸範とも稱はるべき外交官ではないか。その一國を代表する紳士たるものが、少年を相手に決闘を申込むのは卑怯でありますまいか。」

と重々しく言ひ出した。

エス大佐は、滅多に口を利かぬが、その代り一度物を言へば、必ず人をして推服さするやうな正しい道理と重みとを持つてゐる。議論が思はない方面へ走つて、決闘とまで殺氣立つて來たので、一行中の婦人は何うなり行くものであらうと、唯もうハラ／＼してゐたのだが、エス大佐が仲裁すべく口を切つたので辛つと安堵した風であつた。

「拙者は最初から議論を聞いてゐましたが、英國は日本と同盟國であり、また獨逸とは無二の友邦なので、何れを何れとも偏らずに、



茲で尤も公平に、拙者の意見を申し上げたいと思ふ……一體この争論の原因は、ケー外交官が、現に日本人の居るところで、日本人を主として罵倒なさつたから起つた事である。事實の如何は茲で言はぬが、世界で一致した定評がありますから夫れに任せて、その國民の面前で、その國を罵倒するのが第一紳士の爲すべき事でない。誰しも是れを聞いて怒らぬ人はありませんまい。」

大佐は斯う言つて、健兒とケー外交官を等分に見て、

「現にケー氏は、臺灣沖の遭難で、獨逸人が徳義心に缺けてゐると言はれて憤慨するのも同じ道理のやうに思はれる。それを、此處に

居られる川瀬博士が沈黙を守つてゐられる態度には、拙者は殆んど感服してしまつたです。」

暗に川瀬博士を褒めて、獨逸人の無法だと云ふ事を説くのであつた。

ケー外交官には、エス大佐の言が甚だ不服で、

「いや、大佐は何んと言はれても、僕は獨逸人として、愛國心のためこの少年と決闘しなければならん。」

と何處までも我意を張り、尙ほも執念く健闘を迫るのであつた。

エス大佐は、獨逸人の無暴なのを憎み、



「貴下は紳士の道を御存知ないと見える。決闘せよと迫られる相手は少年ですぞ。失言を取消されるなら、また自分から失言を取消されるが至當であると認める。自分の失言を棚へ上げ、相手が少年なるを附込み、無法な要求するのは、無學な労働者が採るべき悪手段で、畏くも紳士たる肩書を有するもの、避くべきこと、は思ひなさらんか。」

と露骨に批難した。

健兒から攻撃されてさへ血迷つたケー外交官であるから、エス大佐から頭ごなしにされて赫と逆せあがつた。

「大佐！お黙りなさい。貴下は我が獨逸國を侮辱するのですな。」  
 「いや侮辱はせん！拙者は唯物の道理を説明してお聞かせ申した丈けである。」

「それが大なる侮辱を加へたと云ふものだ。斯うなれば僕はもう誰彼を用捨はして居られん。この無禮極まる日本少年と決闘して一撃の下に打倒した上、第二には貴下を相手に決闘を申込む。」

「は、あ、拙者を第二決闘の候補者に擧げられるか。」  
 エス大佐は平然たるもので、

「それは拙者の大いに愉快とするところだ。御希望通り決闘いたさ



う。併し、貴下はおそろく拙者と決闘する必要はあるまいと思ひますな。」

と殆んど嘲笑的に言つた。

ケ―外交官は急ぎに急ぎ込んだ。

「僕と決闘するのが怖しいので、其前に逃亡でもする意りか。」

「無禮な言を吐かれるなッ。」

とエス大佐は一喝した。

「拙者は非職ながら英國陸軍大佐である！決闘を申込んだ相手を屈服させるまでは、決して一歩たりと後へ退くやうな腰拔武士ではな

いぞ。」

「ぢや、何故決闘する必要が無いと言はれたか。今のうち逃亡せぬ以上、何うしても僕と決闘することは免れませんぞ。」

「貴下が然う思ふは、獨逸人特有の自惚れの甚だしきものである。

その血迷ふた様子では、拙者と決闘する前に、勇壯活潑なる日本少年の爲め、貴下は見憎い死屍を曝さなければならんよ。」

と言つて哄々と高笑ひする。

「無、無禮なッ」

ケ―外交官は満足に口も利き能はぬまでに憤り激しく、



「エス大佐！そ、その暴言をお忘れなさるな。」

「年は老つても一端自分の口外したことを忘るやうな拙者ではないで、まづ安心して日本少年に打倒されなさい。」

と何處までもエス大佐は皮肉に出るのであつた。

斯くて、健兒と獨逸人との決闘は、明日正午頃、河蒸汽が着陸た地點で行はれることとなつて、健兒は介添を老大佐に依頼した。獨逸人は同じ國のエル會社員を撰んだ。

そして決闘はピストルで、彈丸は各一發と云ふ事に定められた。

その夜、就眼前になると、父の川瀬博士は今まで何んとも言はな

かつたのを、

「これ健兒！日本の恥辱にならぬやうに確り遣れ。」

と言つて、一挺のピストルを我兒に手渡した。

從僕の剛助は、宵から若様の健兒が、傲慢な獨逸人と言争ふてゐるのを傍に在つて聞いてゐるだが、双方英語で話してゐるので、大分變な様子だわい！とは思つてゐるが、英語と云つてはABCのAも知らないの、何んの話かさつぱり分らず茫然としてゐるが、今、博士が健兒にピストルを手渡しながら言はれた言葉を聞き、

「若様、あの獨逸人が何うしたんで……何か喧嘩でもなさるんです



か。

と始めて夢から覺めたやうに聞いた。

健兒は勇しく領いた。

「うむ、剛助、僕は明日の正午を期して、彼の獨逸人と決闘する約束したんだ。」

「え？決闘と云へば大事な生命の取遣りだ！ちや、先刻からごた付いてたのはその決闘のことなんで……」

「さうだ！彼の獨逸人が餘り日本人を侮辱するから、横合から喧嘩を買つて出たんだ。」

「其奴は大變な騒動が持上つたもんですね。碧眼の癖に日本人を馬鹿にするとは太い畜生だ！そんな奴と決闘なすつて、若様のお體にお怪我でもあつちや大變です、手前が若様の代理に出て、あの碧眼をギウと云はせてくれませう。」

と剛助は今直ぐにもケ―外交官の寢室へ飛んで行きさうな氣勢、

「おい剛助！待つてくれ。」

健兒は慌て、引止めた。

「そんな亂暴しちや可けない。」

「亂暴とは獨逸の野郎です！」



と剛助は何時かな承知しない。

「あんな碧眼を生かして置いちや他の人の邪魔になります、今夜のうち手前が片助けてくれます。」

「まあ待て。」

と健兒は重ねて止めた。

「それは可かん！これが日本人同志の喧嘩ならそれで済みもするが、外國の決闘には種々儀式がある。その禮儀を破つては、却つて日本人の恥辱となるから、お前は斷じて手出してはならんぞ。」

「へえ、決闘には難かしい禮儀作法があるんですか。」

「だから、お前は如何なる事があつても黙つて見物してゐろ！相手は高の知れた獨逸人だ、僕が敗北するやうなことはないから。」

と健兒は懇々言ひ聞かせた。

それでも——とは拒みかねて、剛助は仕方なく承諾したが、

「碧眼の畜生奴！今に何うしてくれるか覺えてゐやあがれ。」

と可忌々々しさうに呟くのであつた。

健兒は翌朝起きると直ぐに甲板へ出て、ピストルの練習を始めた。



空氣銃では腕に覚えのある健兒の事であるから、忽ちピストルの發射に慣れて、百發百中、一度び狙つた目標は必らず射外さぬほどになつた。

健兒のピストルは、父の博士が最近に發明した、世界に例のない強力な無烟無聲火薬が裝顛てあるので、普通のピストルの十倍以上も遠方へ達するのである。

獵銃と變りなく、遠く河岸の水面に浮んでゐる水禽、または高く飛んでゐる小禽は、健兒がピストルを向けたと思ふと、聊かの音響もせず煙も出ぬに、必らずバタ／＼と死んで墮ちるので、それを

眺めた船中の人々は、不思議な奇術でも見るやうに吃驚した。

殊に、健兒のこの不思議なピストルの練習振を見て、誰よりも深く驚いたのは、例の外交官の介添に頼まれたエル會社員であつた。そして、直ちに健兒の介添人たる老大佐の船室へ行つて、彼の不思議なピストルを決闘に用ゐられては困ると抗議を申込んだ。

老大佐もこれを聞いて、甲板へ出て見れば全く一種の魔法としか思へない健兒のピストルの威力に驚いて、健兒にその説明を求めたのであつた。



一四 卑怯なる決闘の取消

老大佐から説明を求められた健兒は、ピストルの練習を中止し、莞爾として口を切つた。

「いや、決して驚きなさることはありません！普通のピストルと更に變つた構造はないんですから。」

「それなら、彈丸を發射する度に、音響もすれば煙も出る筈ではないか。然るに、君の使用するピストルは無煙無聲であるが……」  
と老大佐は解し兼ねた面色。

健兒は老大佐にピストルを示して、

「御覽の通りピストルは普通の物ですが、使用する火薬は、僕の父博士が、十數年間殆んど寢食を廢して苦心の結果、漸く發明した無煙無聲火薬で、火力の強烈なことは、世界に誇る下瀬火薬よりも十倍以上であります。それに、船中でピストルを練習するのに、音響がしては他の人を驚かすと思つて、殊更これを用ゐた譯です。」  
と簡単に説明した。

「ふむ。」

老大佐は如何にも驚異に堪へぬ様子で、



「近來我が同盟國の日本で、偉大な火薬が發明されたと聞いたが、その發明者が貴下の父君・川瀬博士であらうとは實に意外でした。と今更のやうに嘆賞するのであつたが、やがて、何か思ひ付いたことがあるらしく、直ぐ獨逸人エル氏の許へ出掛けて行つた。

「貴下の御抗議に依り、早速日本少年の方へ赴き、悉しい説明を聞いたと所が、使用するピストルは不思議でも何んでもなく、日本で最近發明の火薬を使用して居るばかりです。」

大佐はかう説明した後、再び言葉を次ぎ、

「決闘の契約には、ピストルに使用する火薬の制限はしてないか

ら、日本少年はこの新火薬を使用する。それに、今度の決闘の起因は、日本人に發明の能力があるなしの議論も原因の一つとなつてゐるから、日本人の發明力を事實に示す爲めにも頗る必要のこと、考へる。」

と言ひ添へた。

「然しそれでは當方が……」

エル會社員は迷惑らしく、

「先方で新火薬を使用するに、我々のみ舊式火薬を用ゐては片手落ちになりませう。」



と抗議を申込む。

「舊火薬を使用するのが可厭だと思はれたら、發明力の勝ぐれた君等のことだから、決闘前に早速新火薬を發明されたが宜しからう。」  
 「それは無理です！發明と云ふものは容易ならん難事業で、脚下から鳥が立つやうに發明されるものでない。」

「發明が不可能ならお持合せの舊火薬を使用される外はない。そして、決闘する者双方の距離は五十間以上と定めやう。貴下の方で始めに武器を定めたから、今度は拙者の方で距離の條件を定める。これに就て如何なる異議を唱へられても受入れませんぞ。」

斯う言ひ放して、老大佐は得意満面に引取つた。

老大佐は、元來獨逸人の今度の行ひを無法だと信じてゐる。

そして、自分に理屈がなくなつたので、少年を相手に決闘を申込むが如き、ケー外交官の男らしからぬ態度に太く憤慨して、この決闘に不同意だつたのが、健兒の射撃の非常に巧妙なるを見、その練習に使用してゐる新火薬の絶大なる威力を知つたので、これを利用して、傲慢極まる獨逸人に一泡吹かしてくれんと策略を考へたのである。

健兒の使用してゐる川瀬式新火薬なら、その二倍以上の距離まで



十分に届くが、普通の火薬では五十間なんて、ピストルで達する事は不可能だ。

それを十分に承知してゐて、決闘の距離を五十間以上と定め、火薬は勝手なものを使用すると云ふのは、斯うして、獨逸人から謝罪つて決闘を取消させるか、さなくば、健兒に怪我をさせないで、勝利を得るやうにと仕組んだのである。

果して獨逸人は驚いた。

老大佐の言條を通せば、何うしても勝つべき見込みがない。

「これは飛んだことが出来たぞ。」

ケー外交官は蒼くなつて、

「何んとか好い分別はないものだらうか。」

とエル會社員に相談をしかける。

相談相手のエル會社員も、別に好い智恵は浮ばず、

「何うも困つた事が出来たなあ！」

と徒らに頭を掉るばかり。

先方の言ふことに一々道理があるのだから、今更反對して見やうもない。

如何に強情我慢の獨逸人も、これにはスツカリ閉口して、二人額



を鳩めて相談しても、出るのは困つた〜と言ふ一句と嘆息のみで、肝要の智慧も分別もまるで浮ばない。

それに、昨夜は夜食の折のビールに酔つた元氣で、それほど悪感情を持つてゐる譯ではないが、遂ひ日本人を罵仆し、少年と侮つて却つて言ひ詰められた。

その言ひ詰められた鬱抑まぎれに申込んだ決闘が、先方が非常に射撃に上手である上に、ピストルで百間以上も達するやうな新火薬を發明して持つてゐると云ふのだから、今更残念ではあれど、生命あつての物種と、急に憶病風に誘はれ、ケー外交官はエル會社員を

頼んで、決闘の申込みを取消すことにした。

エル會社員は、あまり結構な役目ではないが、おなじ獨逸人から頼まれて見れば厭とも言はれず、老大佐の船室へと赴いた。

「また何か新抗議を申込みに見えられたか。」

と老大佐は獨逸人の顔を見るなり言つた。

「いや、左様ではありません。」

エス會社員は忸怩しながら口を切つた。

「……實は謝罪にまゐつたのです。」

「謝罪!？」



此方は故意と不審立てた。

「何んの謝罪に参られたか知らんが、今更ら別に聴くべき必要はない。決闘さへすれば萬事の解決はつくでないか。」

「然う言はれると實に面目ないですが……ケー外交官が昨夜の暴言は全く酒に酔つてゐた爲めで、今朝になつて非常に後悔してゐる次第です。甚だ申兼ねた次第ですが、貴下から日本少年へ決闘の取消しを願ひ致したいんです。」

とエス會社員は満身に冷汗を流しながら詫入つた。

老大佐は、それ見よ！と言はぬばかりに微笑して、

「拙者も最初からそれを申して居つた。然らば、貴下が第一に失言をお取消しなさい。さすれば、相手にも買ひ言葉の失言を取消させませう。」

と言ふのだ。

この場合、負け公事の獨逸人は何んとも云ふ事が出来ぬ。

ケー外交官は、昨夜聞いてゐた丈けの人々の面前で、健兒に向けて失言を取消した。

健兒もサツパリした態度で、

「いや、さう仰有られると僕も悪かつたです。何うか全部を水に流



してく下さい。」

とケー氏の手を握つた。さうして、昨夜來決闘に關して心配してくれた老大佐其他にも、無事に解決した禮を述べるのであつた。

船中にこんな騒動の起つてゐる間も、蒸汽船はドンドン進航して、ナイル河の上流を溯つて來た。

この邊は全く砂漠の地で、河の兩岸少しの間は、木や草が茂つて、羽色の綺麗な鳥や混蟲の飛んでゐるのを見ることが出来るが、一歩

流域を出づれば限りもいな砂原が、大洋のやうに續いて、處々風の爲めに移動する砂山が、大洋の浪のやうなうねりを以つて横はつてゐるばかり……川幅も追ひ／＼狭くなつて水も淺くなつた。

その日の正午頃船の着いた處は、英國の官憲が駐在してゐて、土人も若干は住んでゐた、文明國で云へば小さな漁村ぐらゐなところである。

河は此處の少し上流で、兩岸から突き出した巨巖の爲めに、水聲が非常に激しく、ナイル河を上下する船の爲めには大難所とせられてゐる。



第一の難所を過ぎて、更に二日ほど河を溯ると、其處に第二の難所があるが、この第一の難所から上流には、巨大な鱒魚が澤山居て、兩岸には、獅子、阿弗利加虎の吠聲を屢々聞くことが出来ると云ふのだ。

船は難所を通過する準備の爲めに、六時間以上は此處に停つて居ると云ふので、一同は上陸して附近を見物することゝなつた。

健兒も、一人船に残つてゐる父の博士に許しを受けて、従僕剛助と共に、他の人々と一緒に出掛けた。

——健兒は何んとも思つて居らぬが、獨逸人は健兒を怨んでゐた。

この敵味方を一緒にした一行が、阿弗利加の蠻人境を見物に赴くのだ。

果して無事に済むであらうか。

### 一五 巖上から眞逆様に

昨夜のことが起つてから、健兒親子は他の團員から一層信用されるやうになつた。

川瀬博士は、人格も高く、學殖も深い學者であることは、他の團員一同も承知はしてゐたが、彼の強力な無烟無聲火薬を發明したそ



の人物と知つて、今更に尊敬の念を強めたのだが、健兒が獨逸人を相手にした議論が立派で、しかも決闘と聞いても更に驚くところあらず、遂ひに相手方を屈服させた勇氣に富める動作は、平常の快潤な少年として好愛されたのに、數倍して團員から親愛されるのであつた。

獨逸人は之れに引替へて、散々に信用を失してしまつたので、勝算の見込みなき決闘を取消すために仕方なく和睦はしたが、健兒を怨む心は根ざし深く残つて、何か復讐する機會あれかしと睨んでゐたのである。

健兒は、そんな事を少しも考へては居なかつたが、老大佐は、早くも獨逸人の卑劣な心を觀破し、太くもその點を心配して、上陸した時から、獨逸人の舉動に注意して、餘所ながら健兒主従の身の上を保護してゐた。

午後の日光は、チリチリと照らして、一步村落の外へ踏出せば、強く照しつける日光に、草も木も強い色に輝いてゐるなかを、目の覚めるやうに綺麗な艶を有つた鳥や昆蟲が飛んでゐる美しさ。

婦人連が揃つて思ひくの華美な洋傘を翳して行く跡から、健兒は佛國のアイ伯爵と珍奇な風光の美を語りながら歩んだ。



獨逸人の混つた一團は、小半丁も健兒等から後れて、その直ぐ背後から、エヌ老大佐が剛助と共に、獨逸人の居動に注意しながら進むのだ。

アイ伯爵は、貴族の美點ばかりを集めて、其處へ學者風を加へたやうな人物で、花の巴里に育つた丈けに、交際には尤も巧みで、學問に熱心なほどは、その談話の際にも殊更らしくなく現れてゐた。而も、伯爵は前から健兒の竹を割つたやうな快瀾のところへ、勇氣にも富んで居るのを愛して、談話相手となり、その深い學問のあるところから、平常に調べたこの亞弗利加の事情やら、歴史、風俗、

さては住んでゐる鳥獸草木等に就て、親切に説明してくれるのであつた。

アイ伯爵は佛蘭西人である。獨逸人とは先天的に仇敵の間柄である。その仇敵たる獨逸人を、健兒が物の美事に屈服させたといふので、今日は一層健兒に好意を持つて、何呉れとなく親切に打解けて談話をしてゐる。

出發地の川に沿ふて二哩ほど村落を距つた一行が、鳥渡した巖の上から川の面を見晴すやうな處へ出たので、先登に立つた婦人連が、其處に立止まつて、川面を見渡しながら後れて來る人々を待合はせ



て居た。

折柄、川の上流から、一行の乗つて來たと同型の汽船が全速力で下つて來た。

「おや、彼方にも觀光團がありますよ。」

「船中に何かあるのぢやないでせうか、大分騒いでゐるやうです。」

「さあ、何うしたんでせう？」

「何んだか不思議ですね。」

婦人連が取留めもない臆説してゐる時、彼の汽船は益々近寄つて今は甲板に立騒ぐ乗客の聲々がハッキリ聞えるやうになつた。

「何事かと耳を澄すと、

「鱒が！鱒が！」

乗客は異口同音に叫ぶのであつた。船中から鱒があると注意されて、陸の婦人連は其の指す方を見れば、川岸を距る事二十間ほどの川の中に、一丈五六尺もあらうと思はるゝ巨鱒が浮んでゐた。

婦人連も、この土地へ來て始めて見る鱒の珍らしさに、

「まあ、彼處に鱒が……」

と立騒ぐので、やゝ後れてゐた健兒と伯爵は、何事が起つたかと大急ぎで走り寄つた。



鰐はまた浮んでゐた。そして、よく見れば、鰐の背中には、鴉に似た鳥がとまつたまゝ、鰐も鳥も暢氣さうに水面に浮んでゐるのであつた。

健兒は不思議さうに見てゐたが、

「鰐は晝寝でもしてゐるんですか、背中に鳥がとまつてるのも知らずに。」

と伯爵に向つて聞いた。

アイ伯爵は靜かに頭を掉つて、

「いや然うではないのですよ、彼の鳥は「鰐の子」と土人が名付け

たもので、鰐の背に寄生する蟲類を取つたり、或ひは、あの恐しげな鰐の口の中へ這入つて、齒の間に狭つてゐる肉などを取つて喰ふが、鰐の方ではそれが爲め、却つて鱗の間や口中を掃除して貰ふので、如彼して平氣に背中で遊ばせて置くのです。」

と健兒に向つて懇ろに説明してくれた。

婦人連も、後れて來た連中も、珍奇な鳥と鰐の話聞いてゐると、一番崖の鼻先へ出てゐた健兒が、何うした機會か、足を踏みこぼらせて、

「呀ッ！」



と叫ぶ間もなく、五六丈もある崖上から、鰐の浮かんでゐる水中へ真逆様に墮落した。

「やッ、若様……」

老大佐と一緒にゐた従僕剛助は、それと見るや驚いて馳せ寄らんとしたが、奇怪なる異變は續發した。

それは、崖上から健兒が墮落した時、直ぐ背後に佇つてゐた獨逸のケー外交官も、健兒と殆んど重なり合ふやうにして河中へ陥つた事である。

不意の椿事に、團員の一行は唯あれよくと高い處で立騒ぐばかりである。

りである。

剛助は崖端から河中を覗き込んで、

「若様！若様！」

と聲を限りに呼ばつた。

然し、墮落した健兒は、一旦は高所から落ちた勢ひで、水底深く沈んだが、物の一分と経たぬうち水面へ浮びあがつた。

此處ぞ懸命の場合と、健兒は得意の拔手を切つて、四五間も下流の方へ泳いで、岸から垂れてゐる蔓草を見出すや、手早く其れに縋り、するくと四五尺も這ひあがつて、さて自分の外に落ちた者が



あるやうな氣がしたので、それは何者かと脚下の川面を見やつたのである。

健兒と一緒に陥入つた獨逸人は、水泳にかけてはまるで零であつた。健兒よりは餘程遅れて水面へ浮び上つた時は、大分水を呑んだ様子で、顔色も蒼白に變つてゐたが、此處で大事な生命を落すやうなことがあつては大變と、浮きつ沈みつバタバタしてゐるのであつたが、二人の陥ちた水音に驚いた鱈は、突然水底深く潜んだので、不意を喰つた鳥はバツと舞ひ上つて對岸へ飛び去つた。

獨逸人が漸く岸へ達して、是れも蔓草に縋つた時、一旦水底へ姿

を隠した鱈は、不意に獨逸人の間近く頭を突出した。そして、其時まだ水面を離れない獨逸人の右足にガバとばかり咬付き、水底へ引入れんとするのである。

「あッ大變だ！助、助けてくれい……！」

獨逸人は血聲を絞つて救助を呼びつゝ、必死に蔓草に縋つて引込まれまいとしたが、鱈に咬付かれた足首が喰切られるか、取縋つた草が切れるか、兎に角、その生命は風前の燈火に均しき悲惨な有様となつた。



一六 回教徒の襲撃

獨逸人が鰐に足を咬付かれて、悲鳴を擧げて居るのを見た健兒は、自分も漸く蔓草に縋つて、危険より遁れんとしてゐる事も忘れ、片手に洋服の衣兜を探してピストルを取出した。

そして、鰐に向つて続け様に發射したが、ピストルは自動連發銃であるから、引金さへ引けば、彈丸は二十發まで連續して飛出す仕掛けになつてゐるのだ。

健兒が鰐の頭へピストルを差向けたと思つたら、もう五六發の彈

丸が鰐の身体へ撃ち込まれてゐた。

例の強烈な無烟無聲火薬が詰めてあるので、音響こそしないが、さしにも堅い鰐の皮を突破つたので、鰐は遂ひに獨逸人の足を離し、血潮に染めた河水のうちを跳ね廻つたが、それも暫し、黄色い腹を上に向けて絶命した。

崖端からこの活劇を見下してゐた剛助は、

「若様！ 巧く遣りました、萬歳々々。」

と嘯鳴つた。

其他の團員も、健兒のこの優れた手際を見るや、



「日本少年萬歲！」

と一時に歡呼の聲を上げた。

健兒は首尾好く鰐を仕留めるや、直ぐ自分で蔓草を傳つて上つて來たが、獨逸人は、右足に重傷を受けたので、辛くも人々に助け上げられたのである。

この日の見物は、獨逸人には不幸を齎したが、健兒は思ひがけぬ鰐狩りをした上、敵を助けたと云ふ勇俠の美名までも得たのである。

る。

辛くも危き生命を取留め、船へ助け入れられたケー外交官は、鰐の爲め思はぬ重傷を負ふたので、此先の見物を断念して、下り船のあるを幸ひ、それに頼んで乗せて貰つて歸途に就いた。おなじ獨逸人のエル會社員も、ケー外交官の看護するため同行した。

獨逸人が負傷したと見ると、他の團員は親切に助けたり慰めたりするのにも、老大佐ばかりは平素の同情心厚きにも似合はず、遠くへ離れて知らぬ顔をして居るのであつた。

そして、獨逸人が二人ともこの一行から別れ去ると、



「彼の獨逸人は實に卑劣な奴だ！決闘のことを根に持つて、今日後方で見えてゐたら、日本少年を不意に崖の上から突落したのだ。然し人を呪は、穴二つ、自分も一緒に陥ちて鱔に足を咬付かれ、生れもつかぬ廢人となつたは痛快であつた！」

と一同のものに語る。

ケ―外交官を親切に介抱した團員は、老大佐からそれと聞かされて、眞から獨逸人の卑劣を憎み出したが、今は後の祭で追ひかけて行つて罵倒する事も出来ないが、自ら殺さんと計つた健兒から、却つて危い生命を助けられたので、彼等二人も、さすがに合はせる顔

がなくて逃げ出したのであらうと、一同は種々な噂をした。

船は第一の難所を越して、また進航を始めた。

第二の難所も無事に越え、一同は何等の變つた事もなく、愉快なる旅行を續けるのであつたが、唯、此間に巨鱔が時々水面に出没するのを認めたのと、第二の難所たる急流へ着く前後、例の如く甲板で談話してゐた一同が、近くの陸地で、非常に大きな猛獸の聲を聞き、婦人連などが顔色を變へて驚いた時、老大佐が、それは獅子の



聲であると言明したくらのが、まづ重なる出来ごとだつた。

愈よ最後の地点まで達して、船はこれ以上溯る事が出来ない。

目的の巨人岩まではまだ數哩あるので、一同は茲から上陸して土人の駱駝を雇つて見物に行くことゝなつた。

着船した翌日、早朝、駱駝の背に跨つた一行十一人は、勇ましく出發した。

この附近は、豫ねて老大佐やアイ伯爵から説明された通り、砂漠を横行してゐるの回教徒の駱駝隊が、時々、巨人岩見物の旅客を襲撃する例が多いので、今日の旅行は僅かに半日行程ながら、大いに冒

険的性質を帯びてゐるので、團員の何れも多少の不安を抱いてゐた。

殊に船着きの村外れまで來ると、埃及人の英國兵が七名程、護衛の爲めに同行すると云つて待合せてゐたので、一同は益す不安の念に驅けられた。

然し、行く路は小さな砂山を一つ越えたばかり、極く平和な内に過ぎて、午前の十時頃には早くも巨人岩の麓へ達した。

巨人岩は、一望限りなき砂漠に、轟然とばかり巨人が立上つてゐる如き形した大巖で、高さは約二百尺もあらうかと思はれ、岩と云ふよりは寧ろ小山と稱すべきものであつた。



團員一同は、その麓に駱駝を乗り捨て、岩の上へ登つて見れば、遙か彼方にナイル河が帯を敷いたやうに流れ、右も左も後も、漫々たる大洋の如き砂漠が、眼界一杯に擴がつて、小さな砂山が所所に起伏してゐるばかり。

案内に立つた通譯の亞刺比亞人は、さも得意さうな顔付で、この附近の歴史、ゴルドン將軍の遠征當時に激戦のあつた事などを、うろ覚えのまゝ述べ立て、居たが、頂上に更に一際小高くなつてゐる巖を指し、

「皆様、此處を御覽なさい。この巖に書いてある文字は、古來此處

へ見物に來た人々が、皆んな紀念の爲めにその姓名を留めて行つた跡であります。」

と説明するのであつた。

團員一同も是れを見て、我れも我れもと、小刀を取出して姓名を岩に彫り付け出した。

その間を、通譯の亞刺比亞人は一人離れて、今來た方を見てゐたが、

「やア、これは大變だ、大變だ、皆様大變な事が出來ました。」  
と忽ち顔色を變へて叫び出す。